The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スピノザにおける絶対無限の意義
Author(s)	中田, 勝也
Citation	メタフュシカ. 1996, 27, p. 85-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66590
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スピノザにおける絶対無限の意義

中田勝也

はじめに

スピノザは『エチカ』のうちに「神の他にはいかなる実体もありえないしまた考えられない」(E1P14) と書き記している。それはつまり神こそ唯一の実体ということではないだろうか。しかし彼はある書簡で「神が一とか唯一とかいわれるのは本当は適当な表現ではない」(EP50/IV239) とも述べている。したがって実体は唯一であるといわれ、そしてまた唯一ではないともいわれていることになる。それでは実体は多なるものでもあるのだろうか。こうした疑問をわれわれは解くことができるように思われる。われわれはその同じ理由で以て神に自由意志や、目的原因を認める人を批判することができるであろう。スピノザはまた、有限様態としての個物は同じく有限様態としての個物からしか決定されないということで、無限なるものとしての神＝実体と有限なるものの間に切断を認めているかのように受け取られもする定理を書き残している。ではこの無限と有限の関係はいかなるものとなっているのであろうか。こうした疑問点を解く鍵が実体の「絶対無限」という性格に求められるというのが本論の主張である。そしてこの絶対無限性の考察のうちにわれわれは、有限なる様態の有限性の担う意義をも見出すことになるのである。まず手始めに実体と属性の考察からこうした探求の道を開始したいと思う。

一　実体と属性

スピノザの実体を考察するとき、『エチカ』第一部冒頭の諸定理の記述にみられる、唯一の実体と無限に多くの属性との関わりが議論の的になる。最終的に、実体のあるいは属性の一と多をめぐってそれは問題となるといえるのだが、とりあえずこの

『エチカ』第一部冒頭の十五定理を二つの段階に区別するというゲルー、ドゥルーズの解釈にしたがうことで問題がわかりやすくなると思われるゆえ、以下この区別にしたがって考察を加えることにする。[1] この区別の第一段階（定理一から八）ではそれぞれ唯一の属性をもった諸実体の演繹がなされる。つまり、実体が属性の差異によって区別され、そしてその異なる属性の数だけの実体が存在することが示される。

一方、次の第二の段階（定理九から十五）では、神の単純な諸要素つまりそれぞれ唯一の属性を有している諸実体から神を構成し、さらに各実体に認められる固有性を神へと与えることが問題となる。そして最終的に神的実体は自己の類においてばかりでなく、絶対的に唯一であるということになるのである。つまり、第二段階においては「無限に多くの、しかも実在的に区別された諸属性から、唯一の実体が成っている」ということが導かれる。

こうして第一、第二両段階を概観するとき、「それではいったい実体は一と多いずれなのだろうか、実体に対する属性の身分はいかなるものなのか」という疑問が生じるであろう。スピノザの実体と属性をめぐる議論はつねにこの点に「矛盾あるいは二律背反」を見出すことで成立してきたといってよい。[2] たとえば、属性に関する観念論的、主観主義的解釈は、「属性とは知性が実体についてその本質を構成していると知覚するもののことである」という属性の定義（E1D4）から、属性を、実体の実在性を表現するものではなく、それを通じて知性が実体をとらえるような知性の認識形式にすぎぬものとして解釈する。この限りにおいては、「実体の唯一性」（E1P14C1）とは相容れない、先の第一段階において示された「属性と同じ数だけ存する実体の多性」を回避することができる。というのも、こうした解釈は結局のところ実体の属性に対する超越を認め、そして両者にヒエラルキーを設けることでとりあえず論理の整合性を確保しているからである。つまり、たとえ無限に多くの諸属性が区別されようとも、それは実在的なものではなく、知性による認識上の区別でしかないために、それらを超越して統一する全体として唯一の高次の実体を想定すればよいということなのである。またこうした観念論的解釈が、自らの後ろ盾としつつ、スピノザの主張をもっぱらテキストにしたがって解釈しようとしてスピノザ説をそこから徐々に解放しようとするところの解釈、つまり「理念の発展という必然的な運動としてスピノザ説を取り入れるという目的で、客観的な分析というよりはたくましい努力に基づいてこのスピノザ説を何から何まで新たにつくりかえようとするヘーゲルの解釈」[3] においては、実体と属性はもはやまったく形式的で外的な関係しかもってはいないかのようである。さらに第一・第二両段階の二律背反を考慮しつつことさらに第二段階の意義を強調してしまうならば、第一段階は

実体の多数性の可能性を示す単なる基本概念であって、後に第二段階においてその可能性を論駁するための予備的な概念集にすぎないのだから、したがってそれはなんら実在的な意義を持たないとする形式主義的な解釈も成り立つだろう。しかしこのいずれもが神的実体をあまりに絶対的な始原とみなすことで属性の実体を構成するという性格を閑却してしまうため、結局のところ実体を「属性を超越するもの」、「属性の彼方の存在」とみなすことに貢献してしまうのである。

ところが、とりあえず実体と属性に関するかぎり、スピノザは両者が同じものを指し示すことを表明することによって以上のような実体と属性とに超越的な関係をみる解釈を拒んでいるのである。たとえば、オルデンブルク宛の書簡二と四には以下のような記述がみられる。「私は属性ということを、それ自身によってまたそれ自身において考えられるいっさいのものと理解していること、したがってそうしたものの概念は他の物の概念を含まないということです」(EP2/IV7)。「私は実体をそれ自身によってまたそれ自身において考えられるもの、換言すればその概念が他の物の概念を含まないものと理解します」(EP4/IV13)。つまりこの二つの書簡においては実体と属性は同じ定義を与えられているというわけである。また『デカルトの哲学原理』においても「実体を創造することと属性を創造することは同じである」(PP1P7S/I163) との主張がみられる。[4] つまり、いずれにおいても実体と属性が同一的に語られているわけである。[5] そこで実体と属性が同じ定義を与えられている以上、先の『エチカ』第一部冒頭の諸定理における二つの段階に見出された困難、「実在的に区別された無限に多くの諸実体と唯一の実体の矛盾」を解決するために、実体による属性の超越というかたちで両者に階層的秩序を導入することはもはや許されまい。したがって、有限なる知性が属性を通じてその背後に隠れている神的実体を把握するという観念論的解釈も、第一段階はそれぞれ一つの属性を有している実体の多数性をほのめかすばかりでそこには実在的意義を認めず、第二段階において初めて始原としての神が現われるゆえに属性は実在性を持つこととなるという形式的解釈も、スピノザの実体と属性を充全に説明しうる解釈ではないということになる。「神の属性とは神的実体の本質を表現するもの、言いかえれば実体に属するもの、と理解されるべきである。したがって実体に属するすべてのものは属性のなかに含まれていなければならない」(E1P19D) のであるから、実体の外部で属性は認識しえないし、反対に属性の外部においても実体を認識しえないということ、つまり実体と属性が超越的に関係しないことこそが、結局実体と属性の同一性によって物語られるべき内容なのである。実体が属性を超越することがないということは、言い換えるなら両者が内在的で必然的な関係を持っているということである。そしてこの実体と属性の内

在的・必然的関係を言い表わす一つの概念をスピノザは提出しているように思われる。それがスピノザの「無限」である。

スピノザによれば、実体と属性の関係を解釈するに際して解釈者たちがそこに二律背反を見出してしまうのは、彼らがそこに最終的に数を見いだしてしまうからであるということになる。だがスピノザにとって数は問題とはならないといってよい。というのも、数とは「単なる想像力の補助手段」あるいは「想像の様式でしかない」(EP12/IV57)からである。したがって「いかなる数を以てしても説明されえない多くのもの」があり、そしてそのものは数えあげることができないというその無際限的な性格のゆえにではなく、その「本性が数なる概念と明白に矛盾する」がゆえに数を超越していることになる(EP12/IV59)。また「われわれはものを共通の類に還元した後でのみそのものを数の概念の下に考えることが出来る」のだから、「ものはその存在に関してのみ一とか唯一とか呼ばれる」ことはあっても、「その本質に関してはそう呼ばれることが出来ない」のであり、また「神の存在は神の本質であり、またわれわれは神の本質について何ら一般的観念を形成することが出来ないのだから、神が一とか唯一とか言われるのは本当は適当な表現ではない」という帰結すらが導かれるのである(EP50/IV239-240)。つまりスピノザの一なる実体と多なる属性の関係を解釈するに際して、そこに全体と部分、類と種といったかたちで階層的秩序を導入しつつ最終的には両者の外的関係を見出す思考のすべての基盤には、結局以上のような数的思考が胚胎していることになってしまう。一方スピノザは、こうした数的思考とは別のところで実体と属性の関係を考えているのである。「神とは、絶対に無限なる実有、言いかえるならばおのおのが永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性からなっている実体のことである」(E1D6)というのがスピノザが実体としての神に与えた定義である。つまり、神は一ですらない「無限」として、「絶対的な無限」として定義されるわけである。そしてわれわれはこの「実体の絶対無限性」の有する固有の性格を、自然あるいは世界との関わりを考察しつつ解説しうると思う。スピノザの神のいわゆる内在神としての性格は、まったく実体の「絶対無限性」を物語るものである。このことはまた「実体は本来唯一ですらない」という先のスピノザの主張をもさらに説明するのである。

二　実体の絶対無限性

スピノザの神的実体を定義付ける「絶対無限 absolute infinitus」とは「無際限 indefinitus」なものではない。それは、有限なるものの否定としての、あるいは有限に対する超越としての「無際限」とは相容れないものなのである。むしろその「無際限」によって固定化されてしまう有限・無限の対立を無化す

るようなものであるという点に、それは固有の意義を見出しているといえる。したがってこの「無限」は、「超越」よりも「内在」に深く関係するものでもある。先に言及した観念論的あるいは形式主義的解釈などのスピノザの実体に向けられる批判は、実体と属性に超越的、外的関係を看取してしまうことで、結局実体の「絶対無限」という性格を見逃してしまっているのである。一般に「無限」とは、限り、あるいは終わりがないということであり、どこまでも果てしないものとみなされる。したがって、数についてこの無限を適用するならば、一を加えるという操作を無限に繰り返すことによってどこまでも無限に増大する数が得られることになる。しかし、このような無限は、むしろ「無際限」と呼ばれるべきものである。なぜならば、この無限は有限の側から、その有限の否定として考えられた無限だからである。しかし、スピノザの「無限」は、このような有限なるものの否定としての無限といった有限・無限の対立的区別を無化するようなものとなっているのである。それは、際限なくどこまでも終わりがない無限後退的なものとは異なった無限として、ある意味ではもはやその外部を持たないもの、終わりのあるもの、あるいは閉じられたものであるといってもよい。したがってこのような「無限」は有限によって無限を規定しようとする非スピノザ的な営為、たとえば数的思考を可能ならしめる想像力(imaginatio)を批判するものとなっている。スピノザの読者は、スピノザ哲学の様々な場面でこの「無限」という概念に出会うのだが、そこで「無限」からみられたスピノザ哲学についての考察がなされるためにはこうした「無限」と「無際限」とが区別される必要があるのである。たしかに、『エチカ』においてはときに、この二語が混同されて用いられており、この限りにおいてスピノザは、厳密さの欠如との批判を免れえない。しかし、彼の著作における用語上の区別ではなくそこに語られている内容が吟味されねばならぬ以上、この区別は極めて重要な意義を有するのである。(6)

「無限」と「無際限」との区別という点に関するかぎり、たしかにデカルトやライプニッツも「無限」と「無際限」を区別し、神にこそ「無際限」ではない「無限」を適用している。しかし彼らの「無限」はスピノザにとって神的実体を説明するには不充分な概念のままにとどまっていることとなる。(7) その理由は以下の神学的議論が示すとおりである。(8)

スピノザによれば神の本性に自由意志が属することを認める人々の主張は最終的に矛盾したものとなってしまう。なぜならばそのことによって神の全能の否定という事態が帰結するからである。「というのも彼らは、神が無限に多くの創造可能なものを認識しながら、しかもそれをけっして創造することができないことを認めざるをえないからである。なぜなら、もしそうではなくて神がその認識するものをすべて創造したとすると、神

は彼らの見解によれば、自己の全能を使い果して不完全なものになってしまうからである。したがって彼らは、神を完全なものとして立てるためには、同時に神は自己の能力の及びうることをことごとくなしうるとは限らないと主張しなければならない結果になる」からである（E1P17S）。彼らがこうした矛盾に陥るのは、その主張が「神がすべてを創造してしまったのにまだそれ以上を創造することが出来ると言っているのに等しい」（KV1-2/I22）からということになる。このとき結局のところ彼らは、「全能」という言葉で被造物に対する神の能力の無際限的な超越性を表現してしまっているのである。しかしもはやそれより外部を持たぬといってもよい無限、言い換えるなら内在的に所産的自然と関係を取り結ぶ無限として性格づけられるスピノザの神にとっては、このような矛盾はありえない。というのもこの場合には、「もし神が一切を創造したとするならば、神はそれ以上を創造することが出来ない」（ibid.）という命題が当然のごとく容認されるからである。また神の全知に関しても同様のことが指摘される。つまり完全なる神は全知であるという前提の下で神の全知に言及するならば、既にすべてを知ってしまっている「神はそれ以上を知ることができないが、しかし神がそれ以上を知りえないということは神の完全性に矛盾することになってしまう、したがって（神は全知ではない）」（ibid.）という事態が帰結することになる。そこで彼は「もし神がすべてを自らの知性のなかにもっており、そして彼の無限なる完全性のために彼がそれ以上を知ることが不可能であるとしたら、……神はまた自らのなかに有していたすべてを産出し、そしてそれらすべてが形相的に自然の中に存在するように、もしくは存在するだろうようにした」（KV1-2/I23）と言うことができるのである。[9] というのも、あるものを認識していながらそれを存在するようにさせないでおくことは、スピノザの神にとっては不可能なことだからである。したがって、「もしも神がそれ以上は創造することができないほどに多くのことを創造することができないとすれば、神はその創造しうることを決して創造しえないことになってしまう。しかし神が創造しうることを創造しえないということはそれ自身において矛盾している。ゆえに（神はすべてを創造したのである）」（ibid.）ということになる。この「それ以上は創造しえない」という意味での不可能性とはもはや神の全能に抵触するものではない。というのも「それ自身において矛盾するような事柄を神が創造することができないとしても、それは決して神の全能には矛盾しない」（KV1-2/I22）からである。スピノザによれば「神は、意志の自由によって作用するものではない」（E1P32C1）のだから「神の力の中にあるとわれわれが考えるすべての物は必然的に存する」（E1P35）のでなければならない。スピノザの神は「絶対無限」としてその外部を問わないであり、したがってすべてのも

のがそのうちにあって何らかの仕方で神を表現しているのである以上、認識はするが産出はしないという潜在性を神自身が保持することはないのである。つまり神は自然のうちに何も隠し立てることは出来ないし、神自体がどこかに隠れ去ることも許されてはいないことになる。

スピノザの目的論批判もこうした認識に根ざしたものである。彼は神に自由原因を認めないのと同様、神が目的のために働くことも認めてはいない。例えばスピノザは以下のように言う。「神あるいは自然がなぜ働くのかの理由あるいは原因と、神あるいは自然がなぜ存在するのかの理由あるいは原因とは同一である。したがって何ら目的のために存在するのではないのと同様に、神はまた何ら目的のために働くものでもない。つまり、その存在と同様にその活動もまた何ら原理または目的を持ってはいないのである」(E4Pref)。なぜならば「もし神が目的のために働くとすれば、神は必然的に何ものかを欠いており、それを欲求していることになるからである」(E1App)。神が目的のために働くことを肯定する人々は、必然的にかくある自然に何らかの欠如を認めた上で、それを埋め合わせるだけのものを神に付与せんと試みていることになってしまうのである。

デカルトやライプニッツの「無限」が神的実体を説明するには不充分な概念のままにとどまっているという理由は以上の点から指摘される。というのも二人はこの「無限の無限性」を「最高完全性」という意味で用いているし、さらには「全知全能」という意味にも理解しているからである。[10] このとき、結局無限は「無限そのものの無限性」ではなく、「完全性の無限性」に転じてしまい、しかもこうした神の「無限な完全性」によって彼らは神の「全知全能」を言いかえてしまうということになるのである。「全能」や「全知」による神の定義は、先にみたとおりその「全知」「全能」そのものが「無限」というよりは「無際限」的な性格を帯びることで奇妙な矛盾に陥ることが示すように、スピノザにとっては不完全な定義である。というのも「全能」や「全知」は「単に形容詞的なもの、実名詞なしには理解されえない形容詞に他ならない」(KV1-1/I18) のであり、したがってそれらによる神の定義は「その定義には実質上形容詞にもなされうるような名詞を含むわけにはいかない」(TIE97) という彼の命題に反するからである。こうした定義は結局「物（神）がいかなるものであるかを認識させるところの属性 Attributa をわれわれに示していない」し、「あるものに属するがしかしそのものがいかなるものであるかをけっして説明しない特性 Propria を示しているにすぎない」のである。なぜならば、全知、全能、万物の原因、最高善、永遠不変等は神にのみ特有ではあっても、それらの特性によって「この特性が帰せられる実有の本質が何であるか、そしてその属性がいかなるものであるかを知ることができないから」(KV1-7/I45) である。つまり、全知や

全能によって神を定義しえたと信じる人々は、神の本質を表す属性と単なる形容詞的なものにすぎない諸特質とを混同しているのであり、最終的に彼らは神を「絶対無限」ではないところの「無際限」的なものとして理解してしまっているのである。完全性に関しても同様である。「神を最高完全な実有であると定義する場合、この定義は起成原因 causa efficiens を表現しないために私はそれから神のあらゆる特質を結論することができないでしょう。反対に、神を（絶対無限な）実有云々（『エチカ』第一部定義六を参照）と定義する場合には……」(EP60/IV 271)。スピノザが神に与えた定義は「絶対に無限なる実有、言いかえればおのおのが永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性からなっている実体」(E1D6) である。「絶対無限」とはしたがって神の最高完全性、全能や全知の無際限性のことではなく、実体としての神そのものを表現するものである。したがって能力や知性の無際限的超越性とは区別された神の「絶対無限性」はその形相的、あるいは内在的性格を充全に表現するものとして単なる形容詞であることを免れているとスピノザはいうのである。

こうして「絶対無限」としての神は産出したすべてを自然のうちに形相的に存在させることから、スピノザの必然的世界観は説明されうる。「自然のうちには一として偶然なものがなく、すべては一定の仕方で存在し、作用するように神の本性の必然性から決定されている」(E1P29) のだが、こうした「絶対無限」としての神の本性を考慮するならば、それはもはやいわゆる決定論ではありえないだろう。というのも、決定論が決定論であるためにはとにかく決定がなされなければならないのだが、そうであるならばたとえば「他でもないこの世界」が選ばれ決定されるためには、論理上暗黙のうちに無際限的に可能な選択肢が前提されていなければならないからである。つまり決定とは、あれでもそれでもない他ならぬこれの決定というわけである。ところがスピノザはこの世界の外部のあの世界に問いかけはしない。その必要は始めからないのであり、またそうしたかくあらぬあの世界への問いかけは間違った振る舞いとすらみなされるであろう。というのも「あるいは自然」として自然と同一的に語られる実体としての神は「それ自身のうちにあってそれ自身によって考えられるもの、つまりその概念を形成するのに他のものの概念を必要としないもの」(E1D3) としての自己原因であり、それに先立つ原因はない。したがってその能力のすべてがそのうちに現実化しているところの自然におけるあらゆる事物の原因は、必然的にこの自然のうちにしかないのである。したがってこの世界と共通の類に属しうるあれらの世界がいまやこの世界の外部に想定されえない以上、やはり実体と同様にこの世界は一つですらないということになるだろう。というのもこの世界はまったく固有なものであり、いわば「この性」を帯

びたものとしてただ端的に単独的な在り方をしているのであって、したがってあらゆる事物は端的に自然のうちで、その法則の働きの下にあることになるからである。それにしてもしかし、このような「この世界の固有性」を語ることは容易なことではないと思われる。というのも、われわれの思考はつねに「この」といった瞬間に「あの」を表象してしまう結果、固有性としての「この性」が常に共通類の一に還元されてしまうからである。しかし、スピノザの「無際限」ではない「絶対無限」はまったくこの世界の「この性」のみを表現するものであって、比較可能な共通類に属している可能的な諸世界という選択肢を承認するものではない。(11)

内的・外的領域をめぐる形式的な議論がある意味ではこうした事態をわかりやすく説明してくれるだろう。いわゆる決定論、あるいは先にみた神の「全知」「全能」といった議論はいずれも結局のところ神の「無際限」的な性格に由来する超越性によって保証されていることになるわけだが、こうした神の超越性はすべて最終的に内・外の二項対立という形式的な議論に還元されると考えられるのである。ある限定された内なる領域とは常にその領域の外部を前提として成立している。というのも、この領域は外部との関わりにおいてそれとの差異を条件として自らの領域全体の同一性を確保するものだからである。つまり、ある内的な領域を支配する規範性が統一的なものであるためにはつねにその統一性を保証する身分・位相がその外部領域に、したがってふつう超越的に想定されねばならないのであり、そして内的領域が内的領域としての同一性を得ることを可能ならしめる働きとしてこうした超越性が維持されるならば、それが神として実体化するときには常に神は、その創造のあるいは産出の諸結果に対して外的な領域を少なくとも実現可能性として保持しておかねばならないことになるだろう。しかしこの場合、内なる領域が必然的に外部領域を要請し、外なしには内が満足することなく、そして内ということですでに外の存在が含意されてしまうような両者の相互依存関係は、結局外部の内部化、あるいは内部の外化というかたちで内・外の二項対立を解消するという手続きを遂行している。しかしある一領域が「この自然」として想定されるならば、スピノザにとってこうした超越性はもっぱら自然内の事物の想像的な所産でしかなく、したがってそもそもこうした自然内の経験によって構成された超越性が、自らの出自たるその自然に対して制限的な規定を及ぼしうるというのはおかしな話なのである。つまり自然の自然による自己規定を理解するために、自然に規定作用を及ぼす超越性を、自然の外部へと超出してゆくようなものとして自然に外在的に設定するわけにはゆかないのだから、まずもって内と外の間に一つの境界を措定し、次にそれを一方の他方への還元というかたちで解消するという手続きはスピノザにとってはまった

くの虚構でしかないということになる。

こうして実体の「絶対無限」という性格は、外部の内部化、内部の外化という「還元の物語」とは別のところで「無限の内在」を説明するのであり、それが取り込まれるべきいかなる二項対立的な超越の図式も認められないのである。そして有限の否定による有限・無限の対立において必然的に確保される、無際限の有限に対する「超越性」に比して、もはやその外部を想定しえない最終的なものという意味における「無限」は、そのうちにおける事象の根拠を必然的に無限の「内在的原理」に求めることになる。というのも、絶対に無限な実体としてのスピノザの「神はあらゆるものの内在的原因であって超越的原因ではない」(E1P18) のであるから。(12)

だがわれわれは結論を急いではならない。というのも未だわれわれは実体を除いては存在する唯一のもの、様態についての考察に及んでいないからである。とりわけ個別的なものとしての有限様態にとって、無限の内在的な原理はいかなる意義を有しているのか、たとえばこの原理の必然性はその諸効果をこの外部を持たぬ世界内の諸存在のさらにその内部において発揮することで、内的本質とでも呼ばるべきものを諸存在のうちに創出してしまうのであろうか、あるいは諸存在相互を外的に結合させるその結合法則、作用のうちにその諸効果をもたらすこととなるのだろうか。

三　無限と有限

スピノザにおける様態とは、「実体の変様、すなわち他のもののうちにあり他のものによって考えられるもの」(E1D5) である。そして、「存在するものはすべてそれ自身のうちにあるか、それとも他のもののうちにあるか」(E1A1) であるから、「それ自身のうちにありそしてそれ自身によって考えられるもの」(E1D3) である実体とともに様態は現実に存在するものである。既にみたように、スピノザにおいては実体と属性が相互に非優越的・形相的な関係を有しているのであり、しかも実体と様態のみが存在するという点からして、様態と実体との接触は容易に説明されることができると考えられはしまいか。しかし、実際のところ事態はそれほど容易ではないのである。

本論の文脈からすれば、「有限で定まった存在を有する物」(E2D7) あるいは「偶然的であり、可滅的でもある」(E2P31C) 個物 res singularis としての有限様態に注目したいと思う。というのも、実体の絶対無限的性格が有限なる個物をもその射程におさめていることの確認がいま望まれるからである。ところが有限様態としての個物については、こうした事態の確認が困難であることを表明するかのような以下の定理が存在している。

「あらゆる個物、すなわち有限で定まった存在をもつあらゆ

る物は、同様に有限で定まった存在をもつ他の原因から存在または作用に決定されるのでなくては存在することも作用に決定されることもできない。さらにこの原因もまた、同様に有限で定まった存在をもつ他の原因から存在または作用に決定されるのでなくては存在することも作用に決定されることもできない。このようにして無限に進む」(E1P28)。

これを簡潔に言うならば、有限なるものは有限なるものからしか決定されないということである。しかしもしそうであるならば、無限者と有限者の間に切断が存するということになってしまい、先に少なくとも実体・属性関係においては拒絶された超越的神によって形成される階層的秩序に基づく原因・結果の外的関係性を裏付けることになりはしないだろうか。たとえば、第一原因から諸段階を経て痩せ衰えて来た諸本質は、実体からはもっとも遠い有限様態を前にして遂に枯渇し、単なる形式あるいは外面性に転じてしまうのであり、そしてこうした無内容の有限様態が、「無限に進む in infinitum」という因果の諸系列をどこまでも無限後退してゆくという、ヘーゲルがスピノザに見出したあの形式主義のニヒリズムをみてとることもできはしまいか。またこの切断を超えることのできない溝として有限の側からとらえるならば、有限者には無限者を知りえないという否定神学的で素朴な超越性を実体に認めることにもなってしまいはしないか。しかしこうした論理はこれまでみてきたかぎりにおいてもスピノザ哲学にはまったくふさわしくないものに思える。というのもスピノザにとって神的実体の非超越性こそがすべてをもっとも充全に説明することのできる原理となっていると考えられるからである。

スピノザは一つの幾何学的モデルによる説明をこころみることで、有限と無限の何らかの関係を示そうとしているのだが、実はそこにおいても無限後退する「無際限」と、ある意味で閉じられた実無限的無限としての「絶対無限」との区別が維持されているといわねばならない。[13] そこでは、一つの巧妙な操作によって、つまり二つの同心円の中心をずらすという簡単な操作によって、以下のような効果が生じている。簡単に言えば、すべてを数えあげることができないという「無際限」的なものがではなく、最大と最小の値のうちに閉じられた、しかも数的規定が適用されるには不適当なある「無限」が有限なる図形のうちに表現されているのである。また「無限」と数的規定の矛盾はこの図形の例の直前にある以下の記述からも理解されよう。

「数学者たちは、いかなる数によっても説明されえない多くのことを発見しており、それだけでもすべての数を規定することができないということが十分わかるのですが、さらに彼らはいかなる数によっても数えあげられない、というよりは存在しうる限りのあらゆる数を超越する多くのものを知っています。しかも彼らはそれがあらゆる数を超越するということを、その部

分が極めて多いということから結論はしていません。むしろそれは、その本性が数なる概念と明白に矛盾するからだとしています」(EP12/IV59)。その系列の終局は不可知の闇へと入りこんでしまうために常に可能的、潜在的部分を保持することになる無限後退する「無際限」には、必ずと言ってよいほど有限の側から「無限」を規定しようとする想像力の作用、数的思考がともなっているというのが一貫したスピノザの主張である。スピノザにとって数とは大いさ mensura、時間とともに「単に思惟の様式、というよりはむしろ想像の様式にすぎないもの」(EP12/IV57) であり、「また想像力の補助的なもの auxilia imaginationis にすぎないゆえに無限ではありえないもの」(EP12/IV58) でしかなかったというのに、この想像力は無限なるものに対してでさえまずもって数えあげようと企て、そして数的規定を適用してそれを分割し、さらにその最小限の単位を比較考量しつつ無限なる対象を有限なるものの寄せ集めによって再構成しようとする。あるいはまた想像力はそうした数的規定を適用しえないと判断されるものには無際限的性格を付与し、そして無限後退する系列の見えなさに説明を加えるために外部に超越的なものを要請しもするであろう。いずれにしろ「無限なる量を仮定する」のではなく「むしろ無限なる量は測定可能であり、そして有限な部分からなると仮定する」想像力の特質からは、「無限なる量は測定可能ではなく、そして有限な部分からなることができない」とするスピノザにしてみれば当然の結果しか導かれえないのだから、結局想像力はひとりよがりの虚構を演じているのみで実際には何もなしてはいないことと等しくなる(E1P15C)。

スピノザは無限概念を最終的に三種類に分けて記述している。「その本性上無限であり、どのようにしても有限であるとは考えられない」無限、あるいは「それが依存している原因の力によって無限であるが、その原因から抽象されて考えられるならば、部分に分割され、有限なものとみられる」無限、そして「どんな数にも等置されないために無限、というよりは無際限といわれるが、こうしたものはしかしより大きいあるいはより小さいものが考えられる」という種類の無限である (EP12/IV60-61)[14]。各無限を便宜上それぞれ第一、第二、第三の無限と規定する。スピノザが例にあげた先の幾何学的モデルによって示されたところの、「有限で限定された物体においてのみ存しうる」(EP50/IV240) ところの図形という有限存在の内に空間の距離の諸不等性として内在的に表現された閉じられた無限とは、もちろん自己の本性による無限ではなく、上の第二の無限、つまり無限様態における無限でしかないというべきであるだろう。しかしこの無限はすでにみたように想像力の補助的なものとしての数概念とは相容れないものなのであるから、この幾何学モデルにおいてわれわれは、実体と属性との関係における場

合と同様の事態を再確認していることになる。つまり無限なるものと有限なるものがある内在的関係を有している限りにおいては、たとえ有限なるものがその有限性のゆえに数性を帯びているとしても、この数性が、無際限性を、すなわちわれわれの規定した第三の無限を規定しているのではないということである。それは言い換えるならば、無限と有限が内在的に関係しているかぎり、両者の関わりにおいて無限が有限の帯びる数性により相対化されることはないということを意味するといえる。

こうした観点からすれば、現実に存在する個物である以上、相互に比較されることによって数的に区別されているにもかかわらず、有限様態もやはり数的に区別されるには不適当であるという諸部分を有しているというべきであるだろう。この点についてスピノザは、物体的実体を神の無限に多くの属性の一つではなく神による被造物とみなすことで、それとある三次元的な形態を有した物体を混同してしまってる人々に反対しながら以下のように説明している。[15]「物質はいたるところで同一であり、物質がいろいろなしかたで変様すると考えられる限りにおいてのみその諸部分は区別されるのであり、したがってその部分は様態的にのみ区別されて実在的には区別されないということにも注意するならば、いっそう明らかであろう。たとえば水は水であるかぎりにおいて分割され、またその諸部分は相互に分割されるとわれわれは考える。しかしそれが物体的実体たる限りにおいてはそうではない。その限りにおいては水は分離されも分割されもしない。さらに水は水としては生成しかつ消滅する。しかし実体としては生成することも消滅することもない」(E1P15C)。ある延長的有限様態は、その物体的側面においては分割・区分されるが、しかし、物体的実体という側面においては分割されることなく同一のままにとどまっているというのである。つまり、水は、その外延的な諸部分において様態的区別を被りながらも、本質としては同一のままにとどまっているというわけである。これまでのわれわれの用語を適用するならば、もちろん前者は想像力に基づく数的区別を、後者は想像力の助けを借りることなくみられた無限を表しているといえる。いずれにしろこのことは、同じ有限様態としての個物の現実存在における様態的区別と、数的な分離・分割を被ることはないその同じ個物の本質とは分けられること、しかも両者が何ら矛盾することなく同じ個物において対応しているということを示唆している。たとえば先の幾何学のモデルの例を補足する以下の説明においてもこうした現実存在と本質との区別という原理が維持されているのをわれわれは確認するばかりである。「異なった中心を有する二つの円の間の全空間の中には、その空間の半分の中の物の二倍の数の部分を考えることができるが、それでいて全空間の部分の数ばかりでなく、その空間の半分の部分の数もすべての数えられる数より大きい」(EP81/IV332)。も

ちろん空間が部分の数に還元されているという意味において、ここにおける数的規定のすべては想像力の産物であること、また二つの閉じられた空間は第二の無限を表しているということは先の例と同様である。ここで重要なのは、数量的比較の結果、大小に区別された空間が、その大小にもかかわらず同一の無限という本質を表現しているということなのである。[16]必然的に存在し（E1P1）、そして存在とその本質が同一である（E1P20）神においては、もはや両者の区別はない。一方、存在と本質双方において神を原因としてもつ様態すなわち「神から産出された物」の場合、その「本質は存在を含まない」（E1P24）のだから「物が存在していても存在していなくても、われわれはその本質に注目するたびに、それが存在も持続も含んではいないことを見出す」（E1P24C）ことができるというわけである。

こうした様態の本質と現実存在との区別こそは、実は本節冒頭で第一部定理二十八とともに生じた疑問に対して解答を与えうるところのものなのではないか。その疑問とは有限なものは有限なものから決定されるという因果系列が無限につづくことから無限と有限様態との間には切断があるという帰結が導かれはしまいかというものであった。確かにそこにはある種の切断が認められる。しかしそれはまったき切断を意味するものではないということである。この切断とは、実体たる神の所産的自然に対する素朴な超越に基づいた、無限者自体と有限者自体の間に存する垂直方向の断絶ではなく、現実に存在する有限様態の担う、数的区別を被りもする有限者相互の外的規定と、それとは異なって数的区別とは無縁なままにとどまる本質の区別を表しているのである。したがって同じ定理の証明における以下の記述、すなわち「神のある属性の絶対的な本性から生起するすべてのものは無限かつ永遠だから」「有限で定まった存在をもつものは神のある属性の絶対的な本性からは産出されえない」（E1P28D）という記述は、ある有限な個物の本質は無限としての本質のうちにとどまりつつ、その同じ個物の現実存在は諸現実存在相互の外的な秩序に従属してもいるということを表明するものと理解できる。そして同じ一つの有限様態がこれら二つの秩序によって説明されるという事態が何ら矛盾したものではないとして以下の記述が付加されるのである。「それは神のある属性が定まった存在をもつ有限な様態的変様に様態化した限りにおいて神ないし神の属性から生起し、あるいは存在ないし作用に決定されなくてはならない。……以下無限につづく」（ibid）。つまりわれわれが規定した、様態化したところの第二の無限は同じ第一の神的無限を表現していること、またその現実存在する側面は、数が適用される様態的区別を被り、外的な秩序にしたがうことがここで表明されていると考えられるのである。

われわれは、神の本質と存在が同一であることをすでに確認

している。そしてまた水の例において物体的実体と仮に呼ばれた属性も同様であることを確認した。そして同じ水の例でこれまた確認したごとく、この区別はあくまでも様態における様態的区別でしかない。したがってこの区別を実在的区別として有限な様態を存在と本質の二規定にしたがって分離し、その現実存在する部分が外的規定を被るがゆえに、実体と様態の内在的関係と矛盾するようなかたちで有限者を実体にとっての単なる外面性へとおとしめるわけではまったくないということを強調しなければならない。様態的区別は様態の持続を実体の外部に位置付けるわけではないのである。もしそのようにとらえるならば、結局のところ素朴で絶対的な断絶を無限と有限の間から有限者の現実存在と本質の間にそのまま置きかえることで、存在と本質が矛盾することなく有限な様態を説明しうることを可能ならしめるところの「絶対無限」の意義が見失われるだろう。「自然のうちには一つとして偶然なものがなく、すべては一定の仕方で存在し・作用するように神の本性の必然性から決定されている」(E1P29)。つまり「神は物の存在の起成原因でもある」(E1P25)のであるから、有限者の存在そのものも神を原因とし、そして、この諸有限者の相互関係における無限系列自体も結局は神の本性の必然性の及ぶ範疇に属しているのである。したがって、この有限者の現実存在する性格と、数的区別を被ることなく無限のうちにとどまる本質との区別は有限と無限の媒介をうまく説明するには好都合であるがゆえに採用された便宜上の概念というわけではないのである。それはあくまでも実体の「絶対無限」、神あるいは自然の「内在」というスピノザ哲学の根幹から要請される概念となっているのである。

こうしてわれわれは無限なるものと有限なるものとの関係における諸有限者の個別化のしくみがいかなるものであるかという点に関して、一つの総括をすることができるように思う。われわれは神の能力あるいは自然の内にはいかなる潜在性・可能性も認められないことを既に二節において確認したわけだが、同様のことを個別的本質概念を検討することで有限者に対しても指摘しうるのではないかと思う。というのも、個別化のしくみにおいては、ある有限な様態の様態化がその可能的な本質による自己実現によってなされるというわけではないからである。したがってスピノザは有限な様態の本質について、「それが与えられればあるものが必然的に定立され、それが除去されればそのあるものが必然的に滅びるようなもの、あるいはそれがなければあるものが、また逆にそのあるものがなければそれが、あることも考えられることもできないようなもの」(E2D2)といいえたのである。つまり様態の本質をわれわれがそれとして個別的に認識しうるのは、その本質が様態の存在とともに、それに対応しつつまさに様態化したかぎりでのことなのである。たしかにある様態の本質自体は、その様態が現実存在しないとし

ても神の属性のうちに含まれていなければならない。なぜならば、その本質自身は自らの原因を神のうちに有していなければならないからである。しかしその限りにおいて、その本質は属性のうちにわれわれに考察しうるようなかたちで個別化されて、数的に区別されて保持されているのではないということである。つまり「事物の本質はその事物が存在しなくてもその事物の名称の下に理解されるのだから、本質の概念はある個別的なものとしては考えられない。本質とともに存在が与えられたときにはじめてそのように考えられるのである。なぜならばそれまでは存在しなかったある対象が存在するからである。たとえば壁の全面が白く塗られているときには、その中にこれやあれといった個別性はない」(KV2-20/I97) のである。したがってスピノザは次のようにも言いえた。「これらの様態は、それがまだ現実に存在しない場合でもやはり同様にその属性のなかに含まれている。そして属性のなかには何ら不等性がなく、また諸様態の本質にもまだ何ら不等性がないのだから、自然のなかに個別性が存在しない限り、観念のなかにも何ら個別性が生じない。しかしこれらの様態のあるものが個別的存在を与えられ、それによりある何らかの仕方でその属性から区別される（この場合はそれらの様態が属性のなかにもっているその個別的存在がこれらの様態の本質の主体なのだから）となると、諸様態の本質のなかに個別性が現れ、したがってそうした物について必然的に観念のなかに生ずるところの想念的本質の中にも個別性が現われるのである」(KV2App/I119)[17]。

今、本質だけに着目するなら、属性のうちに含まれる無差別的な本質自身はある意味で可能的本質であると言えるかもしれない。しかし問われているのは無限なるものとの関わりにおける有限な様態そのものの様態化であってみるならば、やはりこれを可能的本質自体の現実化によって説明することは不可能である。本質は、有限な様態の様態化に際し、何ら特権的な地位を獲得しているわけではない。それはつまり、存在に先立って神の計画的な世界実現の目的を担って可能性のうちにとどまっているようなものではないのである。したがって有限な様態の個別的本質は、スピノザにおいてはたとえばライプニッツにおけるように本質が現実存在へと向かう傾向性を帯びたものではありえない。なぜならばそれは、そのもの自体としては何も欠いてはいないからである。スピノザにとって欠如とは常に、それを埋め合わせるというかたちで目的論を導入するものであった。スピノザの個別的本質は、有限な個物が現実存在するときには、それに対応しつつ存在するもののことであり、そしてその有限者の「存在に固執しようと努める努力」(E3P7) のことである。したがってそれはまたライプニッツのそれのように個物の内に実体の無限なる本質を可能性の現実化というしかたで内属させるようなものとは異なって、無限を表現するものである

というわけである。

こうして有限様態の様態化のしくみにおいて、その本質と現実存在の区別という概念が、目的論を排することで一貫して実体の「絶対無限」を支えていること、しかしこの区別のゆえに有限様態が神の外部に流出するわけでもないことがわかる。一方、同時にわれわれは以上の考察のうちに有限な様態の現実存在するという性格の有する意義が有限者の有限者たるゆえんを物語る上できわめて大きいものであること、すなわちスピノザにおいては無限者と有限者のかかわりは無限のうちにとどまり続ける本質のみによっては十分に説明されえないのであり、有限様態の現実存在相互の外的規定は本質に劣らずその無限と有限の関係において不可欠な要素となっていることを確認せざるをえない。第一部定理二十八に述べられる、一有限様態が直接的に他の様態を必要とすることなく実体と出会われず、実体あるいは属性が様態化したかぎりにおける他の、少なくともひとつ手前の様態から存在や作用に決定されなければならないという事態のうちにはこういった事情が存していたのである。

われわれはこれまで有限の現実存在に伴う様態的区別の無限への適用を戒めてきたわけであるが、いまや有限様態自体に関して言えば、現実存在することはその本性であるといってよいだろう。有限様態としての個物の定義は「有限で定まった存在を有するもの」(E2D7)であった。また個物は「神の属性の変様、あるいは神の属性を一定の仕方で表現する様態に他ならない」(E1P25C)。したがって自らにそのまま実体の本質を内属させるわけではなかったスピノザの有限様態としての個物は、以後その現実存在相互の外的規定の影響下で、しかしそれに対応しつつも無限のうちにとどまり続ける諸本質とともに理性的にこれら諸本質の認識をすすめることで神の認識に到るという道筋を辿ることとなるのである。つまりこの二つの系譜の区別は、ここまで述べられてきた無限から有限へという観点に基づく考察において重要な意義を担ったのと同様に、有限の側から見られる考察においても軽んじられるわけにはいかない効果を及ぼしているということである。

われわれは本論にてまず「絶対無限」なる実体とその属性との非超越的関係性を考察し、次にその実体の「絶対無限」という性格を神と自然との必然的関係の考察において探求し基礎付けようとした。そして最後に本論の最大の関心事項であった「絶対無限」としての神＝実体と有限なる様態の関わりのしくみを検討してきた。そしてそこでは現実存在する有限様態としての個物の外的現実存在規定と無限なる本質との区別を見出し、さらに有限存在において本質が存在を規定するという本質の現実存在に対する特権性は剥奪されていることを確認するとともに、そうはいっても現実存在する個物が被る様態的区別のゆえ

に有限者は無限とは切り離されているというわけではなく、それなりに神＝実体の「絶対無限」を、「表現する」というかたちで内に含んでいるという事態をも確認するに到ったわけである。ここでさらに有限様態が現実存在することの事実性がいかに基礎付けられているのかという疑問が当然生じようかと思われる。というのもスピノザの論理が「世界からの超越」を拒み、「世界という超越」を問うているとすれば、その問いかけの根拠として、実体の「絶対無限性」とともに有限者の現実存在するという性格をも本論にてわれわれは見出すこととなったからである。しかしこの点に関しては、別の機会に譲りたいと思う。こうした論点については、手持ちの観念のうちなる真理性から始めて充全なる認識に到ればよく、始めに真理の可能性の諸条件の基礎付けを要求することのないスピノザの方法論の検討、あるいは有限様態相互の外的規定によってもたらされる、人間身体の活動能力に影響を与えるところの身体の諸変様、あるいはその観念であるところの感情の考察等々が要求されることとなるであろうと予測するに留めておきたい。

注

スピノザのテクストの引用と参照はゲプハルト版全集 Spinoza Opera, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften hrsg. von Carl Gebhardt, C.Winter, Heidelberg. により、以下のように略号化して本文中に示すことにする。EIは『エチカ（ETHICA）』第1部、Pは定理、Dは定義、Aは公理、定理の後のDは証明、Cは系、Sは備考、Pref.は序文、App.は付録をそれぞれ表す。PPは『デカルトの哲学原理（Renati Descartes Principiorum Philosophiae Pars. etII.）』EP12は『書簡12』KV1-1は『神・人間及び人間の幸福に関する短論文（Korte Verhandeling van God de Mensch en deszelfs Welstand）』第1部第1章、TIE49は『知性改善論（Tractatus de Intellectus Emendatione）』第四十九節を表す。ローマ数字はゲプハルト版全集の巻数を表示し、その後の数字はページ数を表す。ただし参照が容易だと思われるものについては省略した。なお、傍点はことわりのないかぎり筆者が付加したものである。

(1) Cf. Martial Gueroult, Spinoza I, Aubier-Montaigne, 1968, Paris, p.109.
G.Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Minuit, 1968, Paris, Chap.1.

(2) Cf.Martial Gueroult, *ibid.*, pp.428-461.

(3) Martial Gueroult, *ibid.*, p.428. スピノザの実体・属性に対するヘーゲルの言及は以下を参照。G.W.F.Hegel, *Wissenschaft der Logik* II, Werke in zwanzig Bänden, Theorie Werkausgabe Suhrkamp Verlag, 1969, Frankfurt ss.196-197. ピエール・マシュレが指摘しているようにここでヘーゲルはまず、スピノザの属性を「二つの属性・思惟と延長だけ」に還元してしまっている。しかもその二属性を非本質な形式、外的反省とみなしている。そして、この外的反省の形式に則ってまず始めに二属性が区別され、それから「絶対的なもの（実体）」の外部で両者が統一されるというのである。しかし実際には、スピノザの属性はたった二つではなく、無数にあるのであり、しかもそれらは単なる形式にすぎないどころか「実体についてその本質を構成している」ものである。しかも諸属性は実体の外部においてあるのではない。ヘーゲルがここで段階的手続とともに導入した思惟の運動という時間的秩序を敢えてスピノザ哲学に適用するならば、スピノザの諸属性は始めから、そして常に実体のうちで、それに従属することなく平等に、相互に還元不可能なかたちで独立しているのである。ヘーゲル

はスピノザの実体と属性に、そこには始めから存しない弁証法的矛盾と対立を無理矢理に読み込もうとしたうえで、その欠如を批判していることになる。cf., Pierre Macherey, *Hegel ou Spinoza*, La Découverte, 1990, Paris, p.116.

(4) 他に、実体と属性に関する明瞭な説明を求めたシモン・ド・フリースの書簡(EP8/IV41)に対してスピノザは、同一事物を表す二つの名前、イスラエルとヤコブを実体と属性に例えて両者を同一的に語っている(EP9/IV46)。cf. Pierre Macherey, *op. cit.*, pp.115-116. そうではなくて二つの名称は一つの実体に与えられた二属性とすることで実体と属性を見誤ってしまう解釈がある。cf. G. Deleuze, *op. cit.*, p.52, H.A. Wolfson, *The Philosophy of Spinoza*, I, Harvard Univ. Press, 1962, Cambridge, Massachusetts, London, p.154.

(5) ピエール・マシュレは「いずれにしろスピノザは『実体と属性とはまったく同じものである、と私は解する』と書きえたはずなのだ」とさえ言っている。また彼は「『属性とは実体の本質を構成するものと解する。知性は実体を属性として(あるがままに)知覚する』というように知性に対する属性の依存を排除するように」スピノザは書けばよかったとも付け加えている。cf. P. Macherey, *op. cit.* pp.116-117.

(6) 無際限的な無限に対し閉じられた一全体としての無限は、無限を一般的な数と同様に実在的なものと考えたカントールの言う実無限に該当するといえる。

(7) Cf. R. Descartes, *Principia Philosophiae*, Œuvres de Descartes, Adam & Tannery, Vrin, Paris, 1964-74, VIII-1, Pars 1-26, 27, pp.14-15, G. W. Leibniz, *Discours de Métaphysique*, Die Philosophischen Schriften von G.W.Leibniz, C.J.Gerhardt, IV, Berlin, 1875, p.427.

(8) もちろん以下における『短論文』の議論もしくは引用は、『エチカ』との差異を自覚しつつなされている。『短論文』では、未だ実体としての意義をもちえていない神と自然そのものとの一致が述べられるのに対し、『エチカ』においては唯一の実体、さらに言えば「絶対無限」なる実体として両者の同一性が導かれているという相違がある。しかし「絶対無限」という性格の説明に際しては両者の差異よりも「内在」という共通性が重視されてよいと考える。cf. Martial Gueroult, *op. cit.*, pp. 472-487. G. Deleuze, *Spinoza Philosophie pratique*, Minuit, 1981, Paris, Chap.5.

(9) 「優勝的に eminenter」ではなく「形相的に formaliter」をスピノザは採用する。この多義的にもちいられる用語のこの場面における意味は次のようなものである。「『優勝的に』とは、原因が結果のすべての実在性を、結果そのものよりも一層完全に含む場合のこと」であり、「これに反して『形相的に』とは、原因が結果のすべての実在性を、結果と同じ程度に完全に含む場合のこと」(PP1A8/I155)である。したがって「形相的に」とは、原因が結果を超え出ることなく、それを内に含んでいるものである以上、スピノザの実体と諸属性の内在的関係を表現するにふさわしい。一方「優勝的に」は、それが原因の完全性が結果のそれを上回る場合を表す以上、因果関係に段階的秩序が存することを示しているのであり、したがってそれが神に対して用いられるとき、神は諸結果に対して超越的なものにならざるをえないだろう。

(10) Cf. R.Descartes, *op. cit*, 1-22, p.13, G. W. Leibniz, ibid., *Monadologie* 1, VI, p.607. 41, VI, p.613.

(11) こうした固有性をめぐる困難については、固有名は確定記述の束に還元されないというクリプキの主張が示唆に富んでいる。われわれが主語の指示対象としての世界を「この」という指示語で指示するかぎり、固有名と同様に述定しえないものとなってしまうということである。Cf.Saul A.Kripke, *Naming and Necessity*, Harvard Univ. Press., 1972,1980, Cambridge, Massa chusetts.

(12) たとえばアントニオ・ネグリは「所与のあるいは世界の地平でないようなあらゆる地平はスピノザの存在論によって排除され」るとし、たとえばこうした世界の地平の外部から提出されるあらゆる形而上学的な問いかけはわれわれを迷信や無知の逃避所としての神の観念につれ戻すといっている。cf. Antonio Negri, *l'Anomalie sauvage*,

PUF., 1982, Paris, p.280.

(13) この書簡十二の例において、「無限」と「無際限」の区別が実体と様態に垂直方向の秩序を導入するものであるとしてネグリは批判する。しかし両者の区別がそのまま様態の地位をおとしめるべきイデオロギーとして機能するわけではない。実体の「絶対無限」こそは、階層的な権力機構の頂点から超越的に下層の諸様態に命令を下すという実体のイデオロギー的機能を批判するものであるというのが本論の主張である。cf.Antonio Negri, *op.cit*, pp.138-145.

(14) ゲルーはスピノザのテクストに忠実に六種類の無限を区別しているが(IV53)、最終的にスピノザ自身が同じ書簡で三種類に収斂させている。cf. Martial Gueroult, *op.cit.*, pp.501-510.

(15) ここで言われる物体的実体とは、もちろんスピノザの実体ではない。実体と属性が同一的に語られているとはいえ、スピノザの延長は思惟とともにデカルトにおけるように実体化されるわけではない。

(16) こうした表現性の特質については、ドゥルーズの著作（1968）において一貫して主張されている。とりわけ第11章。この表現性は実体の「絶対無限性」を充全に解説しうる概念となっているといえる。有限なる個物は無限なる本質をそのまま自己に内属させるのではなく「表現する」ということで、超越的ではない実体との内在的な関係性が説明される。

(17) スピノザは次のようにも言っている。「個物が神の属性のなかに含まれて存在しているかぎりにおいてばかりではなく、さらにまた時間のうちに持続するといわれる限りにおいても存在するといわれるようになると、個物の観念もまた持続するといわれる存在を含むようになるのである」(E2P8C)。もろんこの持続は現実存在するものの特質である。したがって個別的なものとしての有限様態の様態化は持続によっても説明されるといえる。

（なかたかつや　大学院博士後期課程）